
続 自然使い ナチュラル・マスター

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続 自然使い ナチュラル・マスター

【Nコード】

N1726S

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

まさかの続編。 自然の全てを操り、戦うもの。それが、自然使い（ナチュラル・マスター）。 美人元盗賊で刃物使い（カトラリー・マスター）ことマリーと 天才で有名な自然使い（ナチュラル・マスター）のアルエムは、デビットを倒し、日常復帰！・・・と思いきや新たな敵！？ 二人の旅はまだまだ続く！
前作から読んでもらつとさらに理解できると思います。

人物紹介？（前書き）

【諸注意】

ネタバレ有。

本編は三話からです。

人物紹介？

【前作からのキャラ】

アル・ペイズリー

(アルエム・D・ペイズリー)
ナチュラル・マスター

本作の主人公であり、自然使いという異能力者。

雲のようにふわりとした髪に

雷のように黄色い瞳。

25歳。

使える自然は

・火(炎)

・水(氷)

・風(空気)

・植物

・石(岩)

・空(天気)

・土(砂)

らしいが………？

イル

アルの心の中に潜んだもう一つの人格。

すべての能力を使えるが、マイナス方向の技を好む。

全てがアルの逆で、『真っ黒の髪に、紫の瞳』。

心の中の“黒い箱”に封じられていた。

マリー・ウエポムンド

変装が得意。

カトラリー・マスター

刃物使い

元女盗賊。

ナイスバディ。23歳。（本人的にはふせたいらしい）
結構ケチ。根に持つタイプ。

グレイグ・レッゴ

世界で一、二を争う程の銃撃手。ガン・マスター銃使い。

31歳。

アルが自ら、“七年前”牢獄送りにした。
が、何故か脱走中の身。

デビット・アリエルド
ダーク・マスター
闇使い。

アルエムの身体を奪った。

ルナエラ・リキュラ【通称・ルナ】

デビットのしもべ的な人。

語尾がウザイ程上がる。

ツインテールの金髪。

特に『使い』ではないが、透視能力と、どくしん読心能力を持つ。

コリッタ・モウ

ボクっ娘。

“あたし”。パワーコントロールうさぎ&念動力を使う。

ジュレン・アーンフォーム（ウィンド・クリギエル）

ナルシストで女つたらし。
実はデビット側で、タイムマスター時間使い。

アニユエル&リリュエル

二人とも異能力者。

双子。

アニユエル：

弟。

精神操作できる。

リリュエル：

姉。

異空間を扱う能力者。
パラレルワールド・マスター異空間使い。

カイジンゴッド・スパーク

改人というある特別な人間。

美子と、零にタメ口がきける。

ゴーズ・セルイズ

40歳前後の男。

デステニー・マスター運命使い。

バルドⅡ エクス

真っ黒い服や物を好み使う。

デビットと関わりのある人物らしいが……
チャライ。

正義と聖者が嫌い。
バッド・シナリオ
嘘の台本

とがじ みこ
戸梶 美子

黒いものを好む。年齢不詳。

一人称：妾。
あたし

口調が曖昧。

最強らしい？
マスター

創世者という“く使い”の創世者。

うおや
魚谷 あいり

美子に従うメイドさん。

実年齢と外見のギャップが凄い

よしひろ
吉廣 エン

デリーター試験主催者。

歳の割に、見た目は若い。本人曰く、39歳。
美子と知り合いらしいが・・・？

アラド・シフィノ

一時記憶喪失だった青年。

青い髪と赤い目を持つ。
スレリット・マスター
精霊使い。

青の妖精：ループル

れい
零

天才依頼請負人。

透き通るような綺麗な黄緑色のロングストレートと

炎と間違えるかのような赤い瞳の持ち主。

一人称は『僕ちゃん』他人のことはどんなに目上でも『くちゃん』と呼ぶ。

【続編から新キャラ】

暮鳴くれないおとほ 落葉

美子から、秘密情報を教えてもらい（？）
知っていると言われている不思議な少女。

ブランカ・プリンカ（brlanca・blinca）

精神科医。

お得意様や、お金を積んでくれる人しか診察しない。

零のことを「零お嬢様」と呼ぶ。

グレイム・ラルトゥリ

最近の若者が着てそうな

赤いパーカーに、ダブダブズボンを着用。

フィルン・唯・セロル

巻き毛のツインテールで全身真っ青のブレザー。

一人称は、僕。

カルラ・シャウス

メイド服、黒髪ストレートで、メガネ。

一人称は、わたくしで、誰にでも敬語を使う。

ディシダ・ララロ・アシュ

語尾が珍しく「ゝエエエ」や「ゝイイイ」など。

人物紹介？（続編からの主要人物）挿絵付（前書き）

ネタバレしますおお

頑張って16枚も挿絵書きました！

ルナちゃんの髪色ミスりますた^p^
薄いほうが正しいっす

人物紹介？（続編からの主要人物）挿絵付

・・・前編から ・・・この小説から

アルエム・D・ペイズリー

> i 2 6 0 1 0 — 2 2 0 7 <

ナチュラル・マスター

本作の主人公であり、**自然使い**という異能力者。
雲のようにふわりとした髪に
雷のように黄色い瞳。

25歳。

使える自然は

・火（炎）

・水（氷）

・風（空気）

・植物

・石（岩）

・空（天気）

・土（砂）

らしいが・・・？

マリー・ウエポムンド

> i 2 6 0 1 2 — 2 2 0 7 <

変装が得意。

カトラリー・マスター

刃物使い

元女盗賊。

ナイスバディ。23歳。（本人的にはふせたいらしい）
結構ケチ。根に持つタイプ。

戸梶 美子 とかじ みこ

> i 2 6 0 1 3 — 2 2 0 7 <

黒いものを好む。喪服じゃないよ！ 年齢不詳。

一人称：妾 あたし。

口調が曖昧。最強らしい？

マスター
創世者という“く使い”の創世者。

魚谷 あいり うおや

> i 2 6 0 3 6 — 2 2 0 7 <

美子に従うメイドさん。

実年齢と外見のギャップが凄い

零 れい

> i 2 6 0 1 4 — 2 2 0 7 <

天才依頼請負人。

透き通るような綺麗な黄緑色のロングストレートと

炎と間違えるかのような赤い瞳の持ち主。

一人称は『僕ちゃん』他人のことはどんなに目上でも『くちゃん』と呼ぶ。

暮鳴 くれない 落葉 おとしは 【左：制服 右：私服 左下：グレイム側時】

> i 2 6 0 4 1 — 2 2 0 7 < > i 2 6 0 4 2 — 2 2 0 7 <

> i 2 9 6 9 9 — 2 2 0 7 <

美子から、秘密情報を教えてもらい（？）

知つていられると言われている不思議な少女。

ブランカ・プリンカ (branca・blanca)

> i 2 6 0 4 5 — 2 2 0 7 <

精神科医。

お得意様や、お金を積んでくれる人しか診察しない。

零のことを「零お嬢様」と呼ぶ。

デビット・アリエルド

> i 2 6 0 3 9 — 2 2 0 7 <

ダーク・マスター
闇使い。

アルエムの身体を奪った。

ルナを溺愛ちう。

ルナエラ・リキュラ【左：私服 右：戦闘用】

> i 2 6 0 4 3 — 2 2 0 7 < > i 2 6 0 4 4 — 2 2 0 7 <

ちよこつと見えてるのは、白いロングブーツ！

【通称・ルナ】

特に『く使い』ではないが、透視能力と、読心能力どくしんを持つ。
デビットと闇の力を共有ちう。

コリッタ・モウ

> i 2 6 0 3 7 — 2 2 0 7 <

ボクっ娘。

“あたし”。うさぎパワーコントロール&念動力を使う。
どういうことか、ルナエラと仲良し。

グレイム・ラルトゥリ

> i 2 6 0 1 7 — 2 2 0 7 <

最近の若者が着てそうな

赤いパーカーに、ダブダブズボンを着用。

フィルン・唯・セロル

> i 2 6 0 1 9 — 2 2 0 7 <

巻き毛のツインテールで全身真っ青のブレザー。

一人称は、僕。

カルラ・シャウス

> i 2 6 0 1 6 — 2 2 0 7 <

メイド服、黒髪ストレートで、メガネ。

一人称は、わたくしで、誰にでも敬語を使う。

本は必須らしい。

ディシダ・ララロ・アシユ

> i 2 6 0 1 8 — 2 2 0 7 <

語尾が珍しく「ゝエエエ」や「ゝイイイ」など。

お調子者。

明^{ミン} 猫鈴^{マオリン}

> i 2 6 3 7 9 — 2 2 0 7 <

中国人とかではない。どうやらハンドルネームらしい。

落葉と大親友(?)らしい。

クー&ムー

> i 2 6 6 7 8 — 2 2 0 7 <

不思議な幼い子。

常に裸足。

クー：

いつも本を抱えている。(黒いのが本)
泣き虫。

ムー：

一応しゃべるがほぼ無口。 クーの代弁をすることも？
よく笑い、クーとは対。

技名紹介？（前書き）

名前の省略はご了承ください。

キャラクターについては、「人物紹介」を参照してください。

【諸注意】

ネタバレ有。

（最小限にするため、技の名前だけ明記してあります）
本編は三話からです。

技名紹介？

アル（イル）

ナチュラル・マスター
自然使い

アル：

ライクフィスト
「岩手」

イル：

ブラック・エンド
「世界の終わり」
ゼロ
「無」

マリー

カトラリー・マスター
刃物使い

グレイグ

ガン・マスター
銃使い

デビット

ルナエラ

読心能力、透視能力

コリッタ

うさぎ、
念動力
パワーコントロール

うさぎに関して：

ハリネズミフォーム
「針鼠型」

ビッグモード

「おおきくなれ」

リターンリバース
「元に戻れ」

パワーコントロール
念動力に関して：

ジュレン（ウィンド）
タイム・マスター
時間使い

アニユエル&リリユエル
アニユエル： 精神操作

リリユエル：
ワーブルーム
異次元の隙間
パラレルワールド・マスター
異空間使い

ゴッド

ゴーズ
デス・デステニー
運命崩し
デステニー・マスター
運命使い

バルド
フリーアクション
バッド・シナリオ
嘘の台本
「お遊びの時間」

美子
マスター
創世者

アラド
「アヴィス・メズル・リードウ」

零

技名紹介？（後書き）

岩手に関してはあれです
ただの偶然です

人探し

数日前。

「人探し、ですか？」

マリー・ウエポムンドは、いきなり呼ばれたと思いきや戸梶^{とかじ}美子^{みこ}に依頼をされた。

美子は、全身真っ黒な制服に身を包んでいた。

一見普通の高校生だが、創世者^{マスター}という強くて有名な魔法使い一族で、年も200歳を優に超えていた。

「うぬ。日本まで飛んでもらうぞ」

「また、日本ですかあ？」

「そっいうな。ところでアルは？」

「外で遊んでます」

「あいつ25だろ……」

日本

「もう、これで何日探してるのよ！」

「三日ぐらいじゃねー？」

「あんたは気楽でいいわよね!!」

アルエムはのんびりとハンバーガーを食べながら歩いていた。

「というか、あんたの力で探せば簡単じゃん」

「真面目にやろーぜ」

「あんたが言うなよ！」

へーいへい、とやる気なさそうにアルエムが言った。

「きゃあああ！ひったくり！」

「！」

「アル！」

「ああ、わかってる」

こちらへ向かってくるひったくり犯に左手を向ける。

「おい、お前止まらねえと」

アルエムが言い終える前に小さなビルからひとりの少女が降ってきた。

「それ、かーえーせー！！」

と言って、ひったくり犯にかかと落としを食らわせた。
もちろん、そのまま倒れたのだが。

「お姉さん。はいどうぞ」

「あ、ありがとう」

「なあ、マリー。あのガキなんか、美子さんに言われたガキっぽくないか」

「あー・・・、言われてみればそうね。声かける？」

「頼む」

「ねえ、君」

「はい？あたし？」

「うん。ちょっといいかな」

「ああ、はあ。どうぞ」

特訓

「暮鳴 くれない おとは 落葉ですね、はい、あつてますよ」

「じゃあ、落葉ちゃん」

「暮鳴です」

「ああ、はい……」

年下におこられるマリー。

もちろん、アルエムは横で食べ物に夢中だった。

ここは、どこぞの喫茶店。

「んー、もう、ご託はいいです。」

えっと、こつから普通にため口ですけど、

構いせんよね。構ってる暇あれば今すぐ死ね」

後半怖かったがマリーは耳に入れなかったことにした。

「それじゃ、あたしの家に来てよ」

「今？」

「そ、今。あんたらに美子さんが言いたかった事を教えちゃーう」

「！ お前、美子さんのこと知ってるのか？」

そんなところでアルエムが反応する。

「なあに言っちゃってるのさ？」

シニカルに笑い、質問をスルー。

無駄話は省きたいらしい。

「そつちで、準備必要だったらまっててあげるよ、何年でもね」

「いや、そんな、話だけでしょ？」

「ふうん？じゃあ、もう二度と言わないよ、あたしは

“戦えるのか？それで”って言ったんだよ

いちいち偏見かけてんじゃねえよ」

「……………ッ。じゃ、じゃあ、まあ、これでも戦える、し……」

「ふうん・・・」

落葉は嘆息混じりにそう言った。

十数分して、ついた家はただの一軒家。

「何突っ立ってるの？さっさと入ってよ」

玄関を開けて待っている落葉。

苛立ちを隠せず、足が微かに揺れていた。

入ったところで、外観とさほど変わらず普通の一軒家。

落葉は階段を登っていた。

「早くしてよ」

と焦らす。

「あれ？最後まで登らないの？」

階段の中腹まで来たところで落葉は止まった。

「いいの、ここで」

階段に面している壁に手を当てる。
すると。

ガコオン、と音を立て、まるで未来の部屋かのような部屋が現れた。

「入ってよ」

学校

鳴り響くチャイム。

当の落葉は、校庭にいた。
通学しているらしい。

後ろから、誰かが押した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツ！」

それに過剰に反応した落葉は、持っていた傘を後ろの人にぶつけ、その人から離れるように数メートル跳躍し、離れる。

「ったああ・・・・・・・・」

「あ、え、つと、同じクラスの・・・・・・・・」

やってしまったという顔をし、一步後退する。

「ご、ごめんなさい！つい癖で」

「ど、どんな癖よ・・・・・・・・」

「やつちゃったあ・・・・・・・・！学校側にはばらすなって言われてた
し・・・・・・・・」

心の中でちよつと反省会を開く落葉。

そして、玄関から逆方向をむき走り出す。

「ちよ、学校は！？」

「・・・・・・・・」

サボってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ただいま」

「あら？早いじゃない。」

「もう、学校いかない」

「またあ？今度こそ本当よね？電話するわよ」

母親がこんなにすんなり許可したのは当たり前。

落葉は、小学六年生の過程で既に成人並み。

否、それ以上の知能を持っている。

更には去年。

ハーバード大学を一発卒業。

いわば天才である。

「うん。だから」

「アルエムさんたちの修行手伝うのよね」

「外国いくよ」

「行つてらっしゃい。お土産は？」

「期待しないで」

サクサクと話を進める二人。

階段を上がつていく落葉に対し母が言った。

「あの二人夜遅くまで練習してたわ。起こすの？」

「・・・出発は一週間後」

「了解です」

昔話

「起きて、起きて」

ゆさゆさと身体を揺さぶる。

本当に遅くまで練習してたようでなかなか起きない。

アルエムが、だが。

マリーはとっくのとうに起きていた。

「ほんとに手伝ってくれるの？」

「しつこいな」

「あ、はい」

「えっと、学校は？」

「学校？ああ、そんなのもあったかな」

「そんなもの？」

「学校なんて小六の過程でいなくていいはずなんだ」

「どういう、意味？」

そのままですよ、と嘆息する。

『なんだこの子、気持ち悪い！』『こんな子と一緒に授業進めてたら大変だわ』

言われ続けてきた。

天才だから、羨まれる。

そんなの嘘だ。戯言だ。偽物だ。

それは、天才の序章だから。本当に、本当の、本当な天才じゃないかったから。

だから。

『頭いいね』『運動できるね』で終わる。
偽物だから。戯言だから。嘘だから。

そんな天才なんて。

本当の天才は何か？

実際の天才は何か？

現実の天才は何か？

お前の天才は何か？

貴様の天才は何か？

そんな知ってる天才じゃない。

簡単じゃない。

嫌われ続けてきた“本当の天才”は。

天才であることを武器にして、戦った。

それがまた、まずかった。

『あんな能力ありかよ！』『なんだあの技、気持ち悪い』
必ず不評。

嫌われ者の“本当の天才”は誰を信じればいいのか？

「落葉？」

「！」

咄嗟に我に帰る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私はあんたらを信じていいんだよね」
「もちろん」

逃走と捜査

朝起きると、落葉とマリーとアルエムがいたホテルからは、アルエムが姿を消していた。

「ど、どういうこと！？携帯にもつながらないわ・・・」

「携帯なんて、電源切れればいい話。チェックアウトするから準備して」

てきばきと自分の荷物をまとめつつ、マリーに言う。
マリーもそれに従い、自分の荷物をまとめはじめた。

無事にチェックアウトを終え、ホテルから出る。

「あたしの、携帯番号は教えたよね？」

「うん、昨日もらった」

「見つけたら電話して。あたしも電話するから」

こうして、ふと消えてしまったアルエム捜索活動が始まった。

「なによ、教わってる立場でふと消えちゃうなんて」

と言って、“空から”捜索を行っていた。

飛んでいるわけではなく、

“何かブロック状の結界の様なモノ”に乗り、空中にとどまっているのだ。

「ここ一体にはいないな・・・！まさか、美子さんのところにいる、とか？」

それに気づいた落葉は、結界を解き、近場のビルの屋上へ降り立つ。
カバンから携帯を取り出し、アドレス帳を開く。

かけた先の電話は

『もしもし？』

マリーだ。

「マリー、あいつは、美子さんの家にいる！」
アルエム

『なんで?』

「………きつと、

あたしが、美子さんからの伝言を焦らして伸ばしたからだ!ごめん!」

『別にいいわ。今どこな?』

「ええつと、東京タワーに近い場所……。言ってもわかんないな。」

『じゃあ、タワー集合で構わない?私も近いの』
「了解」

集合場所は、東京タワーになった。

落葉はいくつか結界を作り、それに飛び移り移動を開始した。

逃走と捜査の完結

「教えてもらってないい？」

「はい」

少し驚きつつも平常心を保ち美子に応える。

美子は相変わらず漆黒のセーラー服に身を包みそれに合わないロリ系の部屋にいる。

（落葉はこいつらの忍耐力を問うたのか？）

ニヤリと微笑む。

「落葉も面白くなったな。」

「？」

美子はそばにあった真つ黒の傘を手にする。

それを思いつきり振った。

その“重い重い一撃”はアルエムに直撃する。

「ぐあ！？」

壁をぶち破り、隣の部屋にまで飛んだ。

「美子様！？」

即座にメイドのあいりさんが駆けつけてきた。

「おう、あいり。言う事きかん馬鹿弟子を調教してやっとなるだけだ。」

心配には及ばんよ、とはにかむ。

「立て、アル。お前みてえな頭のかったああい奴にやあ、こう言う手段しかねえ」

「師弟……勝負ですか」

ぺっ、と口内の血を吐く。

同時刻

いい勢いで豪華な扉が開く。

「あら？マリーさんに、落葉さん」

「！ あいりさん！あの、アルきてますか？」

「ああ、いらつしゃってますよ。でも今はお会いにならない方がよろし」

微笑みながら言っていたあいりの言葉が切れる。

否、強制的に切れさせられたのだ。

激しい音と共に壁に穴が空いた。

「ちよつと、美子様！！いくら直せるからって壊しすぎです！」

がらがらとガレキから現れたのは美子。

ガレキ付近には、アルエムの姿。

「げっほ、げほ・・・」

「ほら、立ちなああ！」

「げふ・・・っ」

ガレキから降り、アルエムの近くに向かう。

「ちょ、美子さん何してるんですか！」

マリーが止めに入る。

それに対し、顔をしかめ睨みつける。

「教え子を正すのは、師匠あたしの仕事でね」

「アルが何したんですか」

美子は深く嘆息し、頭を掻いた。

「妾あたしがわるもんみたいだねえ。かわりはないけど。まあいい。話そう。」

そう言っているとあいりが反応した。

「応接室ですね」

「客間で構わん。茶でも出しておけ。妾あたしはこれを直してから向かうよ」

「了解です」

「お怪我大丈夫ですか？」

茶菓子と紅茶を出し終えたあிரりが問う。

「つてて……、あ、大丈夫です」

「みして」

落葉が言う。

「あ？」

「見せる」

「ああ……」

傷口を見せるとみるみる治っていく。

「焦らしたあたしが悪い。ごめんなさい」

完治したところで、そう切り出した。

「？ 別に怒ってねえよ？」

（あ、でも、ホテルを抜けたのは焦らされたせいか……）

「お待たせ。」

美子がきた。

家を直してきたのだろう。

「さ、話そうか」

逃走と捜査の完結（後書き）

長くなりすぎた。

新たな

「簡潔に言おう、新たな敵だ」
簡潔すぎる。

「も、もう少し詳しく」

「ん、そだな」

客、基、もとい

アルエム達に出されたはずの茶菓子は
美子によってきれいさっぱり食されてしまった。
それを名残惜しそうにアルエムがからの皿を眺める。

「これ、余所見するでない」
と傘で叩かれた。

「デビットから報告があつたのだ。

最近の、“下克上”事件というものを知つとるか？」

「ああ、小耳に挟んではいますよ。確か、元殺人鬼、でしたっけ」

「そうだ。元殺人鬼がそれを仕事とし、仕事を終えさらには依頼人
を殺す。」

「下克上もくそもねえな」

アルエムが愚痴をこぼす。

「うるさい。アルは黙っておけばいいのじゃ」

「なんで俺だけ？」

「さて、それまではただの序章だ」

無視である。

「それだけでは、警察ざたでお仕舞いちゃんちゃん、なのだが」

「“死んだ依頼人の傷を見たところ、あれはただの殺人鬼ができる
ような、

否、人間わざじゃない”」

美子の言葉に付け足すように落葉が続けた。

「どういう、意味だよ？」

「……あんたら、^{マスター}“使い”が能力を使用するとき、

自分ではわからない特殊な電磁波が出るのは知ってるよね」

両手の人差し指で軽い静電気をつくり、みんなに見せた。

“ぱりぱり”となりながら電気が発せられているのが伺える。

「それが死体から検出されたんさ」

「な！」

静電気を解く。

「これじゃ、警察も妾^{あたし}に頼まざるを得ない。」

「納得いきました……」

「まあ、安心しな。弟子たちには極力協力を頼んである」

当たり前だ。

アルエム達だけで何人いるかわからない敵に突っ走る事は無謀だ。

「その中の一人に、デビットが？」

「うむ。何かあるかの？」

あるに決まっている。

昔、^{アルエム}自分の身体を奪われ、一戦を交えた相手だ。

そう簡単に相容れる訳が無い。

「身体」

そうアルエムが言う。

「デビットの身体は？」

「元通りだ。まあ、戻したのは妾^{あたし}じゃあないがな」

チラリ、と目線を落葉へ移す。

「？ん、ああ、デビットさんって人を戻したのはあたしです」

「！？」

「何か？」

不適に笑む。

彼女は謎が多過ぎるとマリーらは確信した。

新たな（後書き）

マリーと美子を、よく、間違えます

仲間集め

「グレイム―」

少女がつぶやく。

「ああ？」

「こわっ！」

少女は巻き毛の水色ツインテールでブレザー。

ブレザー色も青で、全身真っ青だ。

グレイムと呼ばれた男は赤いパーカーに、

黒いワンサイズ上のだぶだぶズボン。

そしてもう一人。

「カルラ」と呼ばれる女性だった。

「はい？」

彼女はメガネ、メイド服、黒髪ストレート。

説明のしやすい容姿だった。

「なんでしょう、グレイムさん」

「準備はいいか」

「わたくしは何時でも構いませんよ」

「そうか」

じゃあ、と切り出す。

「はじめようか」

「今なんか言った？」

「どしたのよ、アル？」

「……」
いや、なんでもない」

『零れいのトコいつといで』

美子さんの計らいで、

零に会い、敵の居場所を明らかにする協力を頼め、というわけだ。
場所は居酒屋。

地図まで持たされた。

「ええつと、この角を曲がって……」

目の前に見えた料亭が居酒屋です。

「料亭じゃねえか!!」

まったくもって違うものである。

その料亭には“貸切”の一字。

この料亭、結構有名店なんだけどね。

「やあやあ、おふた方! アルエムちゃんおつきくなつたねえ!

小さかった頃から会うのは初めてなきがしちゃうね!」

「初めてですよ、実質。何度か電話とかではお話しましたが」

「かしこまるなつてー! どうかね? 一杯」

「あ、いえ、それよりもですね」

大好きなお酒を否認され、顔をしかめる零。

まあ、仕事の話だから、仕方ないと諦めたらしく酒を置く。

「デビットちゃんから聞いちゃったんだよ」

口に酒のつまみを運びつつ言う。

喋るか食べるかはつきりしろ。

「新たな、敵、ね」

「聞く限りそーとー厄介なもんだね!」

「そうですよね、俺もそう思います」

「ん、わかっとなるよ。僕ちゃん、出来る限り協力しちゃうね」

仲間集め（後書き）

振り返りついでに前のナチユマス読んでたら

前の方が面白いとか・・・

日々劣化してますね。

これからも読んでもらえると嬉しいでsry

肉弾戦修行

昨日、零の自宅（？）へ向かった。
協力してくれる、力強かった。

「だけど」

アルエムが言う。

「相手の力とか、なーんも俺ら知らねえんだよな」

ここは美子の自宅（？）。

零といい、美子といい、神出鬼没で別荘を嫌というほど持っている
金持ちだ。

この一軒は美子から借りたのだ。

一人一部屋。

なんとも豪勢だ。

もちろん、修行も含むため、美子もここで寝泊まりする。

明日は早い。

（寝るか）

明日のため、アルエムは目を閉じた。

「おっはよーう！しょくーん！」

零である。

「え？」

「やあやあ、美子ちゃんに朝早くから呼ばれちゃってえ。

二日酔いなのにひどいよね！」

昨日協力すると言ったのに飲む方が悪いんです。

「今日の修行は僕ちゃんたんとーう！」

美子ちゃんスケジュールちゃんと組んじゃってるね！

僕ちゃん感心、感心」

腕を組みうんうん、と頷く。

「えっと、それよりも、なぜ、あなたが？」

「んえんえ？僕ちゃんもちゃーんと戦えるってことだよーう」と言って取り出したのはナイフ。

“ひゅひゅん”と風を切りつつ回っている。

「って言ってもアルエムちゃんみたいに

僕ちゃんは遠距離戦得意じゃないからねー」

それはもちろんだ。

マスターを所有しているわけではない。

「だから、僕ちゃんは肉弾戦を鍛えちゃうよ」

よろしくね、と微笑んだ。

「じゃあ、俺が行く」

アルエムが一步前に出る。

「俺はほぼ、ナチュラルに頼ってきたからな」

腕まくりをして、本当にやる気らしい。

「んふふ。安心しちゃってよ。

僕ちゃんは君たちが思ってるほど強くもないから」

「な」

アルエムはこの大きな庭に仰向けになって倒れていた。

惨敗、である。

「強くないっていったんじゃ！？」

「あれは、言葉の綾ってもんだよ。ん？なんか違うな。

まあ、口は災いのもとっていつちやうからね」

嘘で、災いを起こした。

「言葉で騙されちゃうアルエムちゃんもアルエムちゃんだよ？」

「単純バカ……」

マリーがボソリといった。

「それに一言言うね」

回していたナイフを止めていう。

「アルエムちゃんはナイフを意識しすぎかな。
かと言って意識しないのもあれだけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こういうことなら、カトラリー・マスター刃物使いこと、マリーちゃんと戦っちゃえば
よかつちゃったね」

「私、ですか」

「でも君は肉弾戦はだいじょうぶみたいだね」

「！」

「精神面があれかなー。アニエル、リリエルに鍛えてもらっちゃって」

あの二人か、とマリーは思い出す。

あの二人には前、世話になった。

また、世話になるのか。

「それがやーなら、そだな、いい、精神科医を紹介しちゃうね」
「？」

肉弾戦修行？

「ここか」

零に持たされた地図の通りに歩くと、一軒の古い家についた。

ここが彼女曰く。

いい精神科医の家らしい。

「名前はなんて読むんだろう？」

「brl a n c c a・b l i n c a」ブ、バ？ブーランカ？」

「ブランカ・プリンカ、だ気をつけろ、女」

「！」

彼は、悠々と庭の手入れをしていた。

「ブランカさん」

（女みたいね）

「ああ、女みてえな名前で悪かったな」

「！？」

（私口に出していった？）

「いってねえ」

「盗聴やめてください。もう驚くのも飽き飽きです」

「そーか、お前アニユ、リリュにあつてたっけな？」

それでも驚かねえのはすげえな」

「アルと一緒に旅してるので」

ブランカは「アル、アル？」と呪文の様に言い始めた。

「誰だったかな、アル、アル、アル」

“ばつん”と植物の切れるいい音がした。

不格好になった。

「うおおお、間違えた！ア、アル！ああ、

“アルエム・D・ペイズリー”か」

「ご存知で？」

ナチュラル・マスター

「自然使いなんて、名がしれてるさ

「なあ、カトリー・マスター刃物使いちゃんよ」
「！」

「零さん」

「ん？」

心配そうにアルエムが話しかける。
きつとマリーについてだ。

「マリー、大丈夫でしょうか」

やっぱりマリーについてだった。

「大丈夫だって！ブランカは変な奴だけど、しっかりしてるから」
「ブランカ？女性ですか？」

「いや、男だよ。本人的にも劣等感コンプレックスらしいからね」
「はあ」

アルエムは曖昧な相槌を打った。

「随分綺麗なんですね」

「外装と違ってとても言いたいのか」

「え、いえ……」

「まあいいがな。俺はな、普通の精神科医じゃねえんだよ。
本来ならばお前なんか庶民の相談しんりょうなんかしねえ」

「しょ、みんな……」

少しカチンときたようだ。

だがそこで切れていては、話にならない。

「零お嬢様のお頼みとあらあ、断るわけにもいかねえ」

「れ、零お嬢様?!」

「あの御方には助けられた。．．．私情を挟んで悪い」

と言う間に場所についたようだ。

ブランカは扉を開ける。

「さあ、どうぞ、患者様」

とわざとらしく言う。

「．．．．．．．．．．ありがとう」

「ふむ、よろしい。」

肉弾戦修行？（後書き）

ブランカのスペルは別に英語でけとーにはめただけですよー

肉弾戦修行？

「がっはあ」

苦しそうに膝をつく。

「んっふふん」

「れ、零さん……、あ、あんた、なにもんだ？」

「僕ちゃん？僕ちゃん別になにものでもなあいよ？」

んしし、と不思議に笑う。

「アルエムちゃん、零^{ゼロ}処理戦^{しりせん}拳^{けん}つて、知^しつちやつてるかな？」

「も、勿論知つてますよ！」

世界有数の暗殺拳法をすべてこの世から抹消したと言われる伝説
の
」

「あれ僕ちゃんが作つたんだよー」

さらりと言いつ述べた。

「う、え、ええええええ！？」

「アルエムちゃんは第一の弟子となつちやうんだよ！」

光栄に思つちやつたりしちやつてね」

「こ………」

（光栄どころか！感嘆で言葉も出ませんよ！）

「んふふ。さあ、まずはアルエムちゃんの実力を教えてもらつちやうね」

「ただいまー」

精神治療を終え、帰ってきたマリィ。

あとは結果待ちなので、暇なのだ。

修行の成果をみるべく、庭に足を踏み入れた瞬間

「がああ！」

とつめき声をあげているアルエムが飛んできた。

「えええ！？」

「んー、弱っちいなあ。って、マリィちゃん！おつかえりんご！」

「た、ただいまです………」

硬いなあ、と苦笑いした。

「さあさ、立ちなよお。」

「ダメっす、腹減って………」

「あ、そだねー。ご飯食べてないね。」

ちようどマリィちゃんもいるし、夕食としよっか

と、手をたたく。

すると、沢山のメイドやら、執事やらが現れ、食事の準備を始めた。

「今晚は、お庭で焼肉ばーちー！」

「零様、焼肉は昨日です。今日はお好み焼きです」

「そっかあ」

どっちにしろ、零と一緒にいると、太りそうだ。

肉弾戦修行？（後書き）

零の口調意外と気に入っちゃってるんだよね！

肉弾戦修行？

「しっかしさあ」

口に食べ物を思いつきり含み喋る零。

使っているフォークを二人に向ける。

フォークの先にはパスタが数本、絡まっていた。

食べるつもりだろう。

「君たち、取り込みが遅すぎる。」

初めて発売されたパソコンを今でも使い続けてるみたいだよ！」

まあ僕ちゃんなら改造して今よりもっと使いやすく出来るけどね、と笑った。

だが、それはパソコンの場合である。

「人間は元々専門外なんだよね。」

それはそうである。

請負人と言っても、仕事はほぼ引きこもり。

ハッカー、クラッカー、パソコンに関わる仕事しか入らないのだ。

「……、元々、っていうか。専門外にせざるを得なかったんだよ。」

こんな仕事をしていれば。

「まあ、いいや。運動するし、僕ちゃんはこれでごちでした！

メイドちゃん、執事ちゃん、三時のオヤツもお願いしちゃうね」

「………？」

零が余りにも元気がなかったため、メイドたちも不安に思った。

午後からは、修行はなぜが中止になった。

零が元気がないのも気になる。

「大丈夫かしら、零さん………」

「………大丈夫だろ」

そういう会話をなんども続けた。
本当に、心の底から、心配なのだ。
そんなとき。

携帯が鳴る。 マリーのものだ。

差出人は、『戸梶 美子』。

「はい、もしもし?」

『ぐつが……』

「!？」

カシャン、と聞く限りケータイが落ちる音。
何か、あった。

「美子さん!? 美子さん!!」

『あ? ああ、誰かに電話してたんだアアア? もしもしイイイ?』
「……誰?」

『オレ? オレ? オレのこと!? ねえ、おねーさん!!』

『調子に乗るな、デイシダ』

『お固いのねえええ!!』

デイシダ・ラルロ・アシユ。

グレイム・ラルトウリ。

フィルン・唯・セロル。

カルラ・シャウス。

新たな、敵。

『美子っツーのオオオ? このババア! あっはは! 遊びに来いよ!』
と、デイシダが言う。

『おふざけはここまでにして、帰りましょう。証拠隠滅はいつもわたくしですから。』

『そおだよお! 僕なんて、カルラに買ってもらったアイス放置してきたんだよお?』

今頃溶けちゃってるよー、と電話越しに茶番。

「ねえ、なんなの、あんたたち……」

『ふん。おい、女。アルエムとやらの伝えておけ。』

「？」

『戸梶美子は、あと一時間後に死す、とな』
そこで、ぶちりと電話が切れた。

「ねえ、グレイム！」

「何だ」

「ほんとーに、このおねーさん、死んじゃうの？」

「アホか。リップサーヴィスの激しいver.だ」

「意味が違いますわ」

嘘つきと修行

美子さん宅。

一時間経ったところで、美子は死にはしなかったが昏睡状態のままだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、いつもなら、跳ね上がって起きるはずなのに・・・・・・・・」

アルエムが心配そうに言う。

「仕方ありません」

ドアを開けて入ってきたのはあいり。

水と濡れたタオルを持っていた。

「・・・・・・・・・・、創世者^{マスター}としては、年ではありませんが、人間としてもう。
フフ・・・・・・・・、私もですね。それに」

「？」

「創世者^{マスター}としては珍しい・・・・・・・・、

五十人以上に力を分け与えているわけですから

この年でこの体力、見た目、諸々を保つ力も薄れてきてるみたいですよ」

確かに、美子の顔を見る限り、疲れてそうに見える。

昏睡状態だが、気持ちよく眠れないというのも不憫だ。

「・・・・・・・・・・、今日はもうお引き取りください」

「え、ああ。俺らもそうするつもりでした。お大事にと伝えてください」

「分かりました」

「あいり。」

「起きてらっしゃってんですか。いつ頃から？」

「・・・お前がこの部屋入ったとき。」

「三回ありますよ」

「マリーたちがいたとき」

「まあ、悪い人ですね」

あいりは、レモンティーをとくとくと注ぐ。

「・・・、頼んでないぞ」

「ええ、そうですよ？ “風邪には”レモンティーが一番ですからね」
「はん」

美子は拗ねるように笑った。

ほかほかのレモンティーが入ったところで、美子は話し始める。

「あいり、演技、ありがとーな」

「今更何をおっしゃるんですか？ 全く」

「・・・」

「あれは全て、美子様がめんどくさかったただけでしょう・・・、
もう」

はあ、と嘆息した。

奇襲されたことも。

美子の生命力がピンチなものも。

全て何もかも然り。

嘘だったのだ。

実を言うと、マリーたちの戦意をそそるため。
恩師である自分自身ですることによって。
修行にも打ち込みやすくなる。

「だけど、一番肝心なのは、零だよ」

「何かおアリで？」

「ああ、何かが弱々しい……」

修行再開！？

「零さんが、倒れたあ？」

美子に続き零もダウン。

（正しくは美子はダウンしてないのだが。）

「はい、言っな、と止められていたのですが。」

零様は、あなたがたの修行、依頼共に寝ずに受けておりました。」

「ね、寝ないで？」

「はい。昼間はあなたがたについて。」

夜は眠気飛ばし用の薬を飲みパソコンに向かっておられました。」

「そつとう無理してるじゃない……………」

「一日だけではありません。」

「は？」

「今日を含め二週間」

「え……………」

「ですから」

執事さんは急に冷たい表情、声になり言う。

「これ以上、主に近づかないください。」

「な……………」

「通じませんでしたか？それではもう一度わかり易く申しましょう」
玄関にいた、マリー、アルエムを突き飛ばし続ける。

「もう二度と、零様に近づかないください。」

消える」

「……………」

「俺なら治せるけど？」

「はあ？」

そうアルエムが言うと、執事は不服そうに言う。

「また彼女を動かそうとするのですか？」

休みも取らずに修行に手伝えというのですか？」

水を差したみたいだった。

アルエムは空気と場が読めない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう、ですね、帰ります。」

マリーが沈黙を切った。

「でも、マリー！」

「いいのよ、いい。さあ、行きましょう」

「やあ、どうしたの」

オープンカフェで特大パフェ十分完食に挑戦している彼女。
落葉に二人は声をかけた。

「あと一分まって」

と言ってもまだパフェは半分まで行っていない。

どんどん量が減っていく。

「勝てたら一万円なんだ。ふふ。黒字黒字。」

「店的には、大赤字だよ」
おれい

そして三十秒も経たないうちに、パフェは綺麗に皿から消えた。
「ごちそうさま！一万円はいらないよ。」

さあで、その運動場借りておいたから修行しようか」

「まだ、私たち、何も言ってますけど・・・・・・・・」

「概ね察してるよ。」

美子さん、零さん、共に倒れたからあたしにきた、だろう？」

概ねというか、すべて察していた。

「さあ、行こう」

修行再開

ぎいい、と音を立ててドアがあく。
仲間真っ暗だった。

「“相手”はもう来てるはずだよ」
「？」

パチリと電気が付いた。
反対側の入口には三人の影。
そこに居た三人は ！！

コリッタ・モウ
ルナエラ・リキュラ
そして

デビット・アリエルド。

「で、デビット！？」とアルエムが叫ぶ。

「やあ、アルエム！！」

ごん、と鈍い音を立てて何かがデビットの頭に直撃する。
当たたのはルナエラだった。

「デビット！ダメだよ！」

「「え？」」

マリーとアルエムは顔を見合わせた。

それは、そうだ。

ルナエラはデビットに向け「デビット様」と呼んでいたはず。

しかも敬語でない。

デビットは気持ち悪い笑みをルナエラに向け、「ルナアア」と言う。

「ど、どーなってるの？ねえ、コリッタ……………」

「えー、つとですね！」

久々のこのテンション。

「デビットがルナに対してのみ、ドM&変態に目覚め
「ふははははは！」

「きゃあああああ！！！」

「助けねば！」

「さて、本題に入ろう」

デビットは壁にもたれていた。

フルボッコにでもされたのだろう。

「そろしますか」と一同。

「でもあの状態じゃあ、彼は戦えないんじゃない？」

あの状態にしたのは、お前らだろ。

「うん」

「そこは私が戦^{カバ}います」

「？」

「ルナち……、ルナエラちゃんは」

「ルナでいいですよ」

昔呼ぶなって言ったくせに。

「え？うん、読心と透視能力だけじゃなかったかしら？」

いえ、と否定するように手を振る。

「美子さんに頼み込んで、

“私たち二人”で闇の力を共有することにしたんです」

「！……なるほどね」

「さあ、始めましょう？」

と、ルナエラは微笑む。

ざざ、と白いブーツが床をこする。

「ま、マリー！！！」

と、アルエムが。

「お前弱くね!?!」

文句を言う。

「失礼ね! あっちが強いのだよ!?!」

修行再開（後書き）

現実でこれの漫画描き始めました。
なので、挿絵をあげたくてしょうがないです！！
かきますね？

修行再開？

ルナエラが今、身にまとっているこの服。

“モード・戦”。

これは、ルナエラが戦闘で動きやすいよう、ダイクマスター闇使いで作ったもの。

勿論、解除すれば元通りだし、

元々の衣服が傷つくこともない。

便利な一品だ。

かくゆうデビットは。

更衣室のロッカーに閉じ込められていた。

「出せええ！！」

「ああ！そつかあ！」

と、ルナエラが手を打つ。

「マリーさんは接近戦か！」

今更気づく。

マリーはその天然さに無邪気を覚えた。

「忘れてたよ」とはにかなだ。

「ずっと遠距離で攻撃しちゃった」

えへへ、と可愛らしく笑う。

マリーはその笑みが悪魔にも見えた。

「じゃ、改めて」

と、またまた微笑んだ。

修行再開？（後書き）

ミスってあげたのでソッコーで更新
短めです

修行再開？

「まあた、マリーの負け？」

ギャラリーでアルエムが呟く。

「だってどうせ、ルナちゃんの読心で読まれてるんでしょうお」と言い訳するマリー。

脱力しきつたのか、床に座り込んでいる。

「大丈夫！闇使^{このちから}つてる時は使えないの」

「どっちにしろ、マリーはダメだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

落葉のキツイツツコミにアルエムは顔を真っ青にした。

ガッ、ドガガガッ、と痛々しい音が響く。

「なあな」

「なに？」

「俺散歩してきていい？」

不意にアルエムが言う。

「まあ、かれこれ三時間してるしね。

いいだろう」

「さんきゅー」

落葉は心の中で深く嘆息した。

（橋だ）

散歩中に橋を見つけたアルエム。

ふわりと青いツインテールが揺れる。

「うおおおおお！！！！」

今にも飛び降りそうな姿勢。

「え？」

アルエムは咄嗟に風を使い、その少女をおろした。

「うわうつ！」

ドシャ、と情のない音。

「ったーい！ちよつとお、何すんのさああー！」

起き上がった真つ青な少女。

「はあ！？どこのキチガイか知らねえが、自殺はよくねえよ?!」

（こいつ！アルエム！）

「・・・・ふん、まあいいやあ」

（何て言うタイミング！）

「つか、青いな、お前」とアルエムはとぼけている。

「いいの。僕青好きだから」

くすくすと不敵に微笑む。

流石のアルエムも引いた。

そして、橋の角に体重をかける。

「お、おい!!」

落ちる。

アルエムは少女を確認するため、下を見るが。。

流れているのは川だけ。

川に何かが飛び込んだ形跡もない。

「・・・・・・」

「消えた？」

ギイイン。ガイイン。

刃物がぶつかり合う音。

その様子を落葉が真剣な眼差しで腕組みをし、眺めていた。
ふと、目を閉じる。

『あいつは 』

『あいつらは甘すぎる。 』

『甘い? 』

聞き覚えのある声。

『フン 』

鼻で笑う。

『こーゆーのはな

優しさ

つつんだよ 』

『優しさ……』

とぼけたように、落葉は繰り返した。

お前はそれが欠けているんだけどな、と美子が笑った。

『だけど 』

『? 』

『戦いに慈悲や優しさなんて

必要ない。 』

「……は、落葉!」

「!」

マリーの声で現実に引き戻される。

「……マリー?」

「大丈夫? ぼーっとしてたわよ」

「え、そう。どうしたの?」

「お休みもらえないかしら?」

につこり営業スマイルでマリーはそう申し出た。

「休み？・・・いいよ。じゃあアイスでも誰か買ってきてよ」と、お金を出す。

いちまんえん。

「私行くわ！」

ただ休みたいだけである。

「コリツタ、お願い」

「はぁーい！」

マリーは盛大に落胆した。

修行再開？

アイスを楽しそうに食べる三人をこれまた険しい表情で見つめる落葉。

当の彼女の分のアイスはないのだ。

自分から断ったのである。

（優しさ……、あたしには一生理解で）

その思考回路を遮るように、大きな音でドアがあく。

そしてアルエムの「ちよつと聞いてくれよ！！！」である。

落葉はそれにいらつき、アルエムをいじめた。

「不思議な青い少女か……」
遠い目で考える。

「探すかいがありそうね」

（それはいいとして）

顔を上げ、マリーを見る。

マリーの成長が余りにも“悪すぎる”のだ。

「マリー」

「！」

「やる気がないなら、帰って」

「は！？どーいう」

マリーが最後まで言わずに落葉が指を上げ、それを横に振る。すると、パクツと不吉な音がする。

アルエムの首からパシュウウウと盛大に、血が吹き出す。

「つぐ！？がああ！！！」

「アル!!」

「何すんの!!」

「そうさ、“怒れ”」

「は？」

マリーは二回とぼけることになった。

「お前らはなんだ？敵と遊ぶのか？あ？」

はっと、マリーは気づく。

確かに言われてみればそうだ。

「相手は、“美子を死へと近付けた”。」

（まあ、嘘なんだけど）

「あたしは

お前らは恩師がただ死ぬのを、見過ごすのか

と。聞いたんだ!!」

修行再開？（前書き）

今回は前作「自然使い ナチュラル・マスター」の『成長の輪』編をご覧になって読まれると更に理解しやすいと思います。

修行再開？

「助けられるとおもたのか？そんな慈悲で！
覚悟は？」

すう、と息を吸いもう一度続ける。

「デビットのときもそうだ。何故」

「・・・・・・・・・・・・・・・・殺めずに生かしたの？」

落葉の言葉を継いだのは、ルナエラだった。

そして、いつにもなく険しい表情で

「私も、その甘さが嫌い」

そうすれば“私たちは苦しまずにすんだ”、と嘆く。

「違う！！」

ルナエラの言葉を否定するアルム。

「死んでいい人間なんて、いない」

落葉に切られた首は、自然ナチュラルでなおしたのだろう。

「ふっ、あっはははは！」と。

落葉は笑った。

「戯言たわごとを！」

と一気に真剣な、顔つきに戻る。

「！」

「なんだ？それ！

“死んでいい人はいない？” はは！笑える冗談ジョークだよ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それなら、殺されていい人もいないはずだよねえ」

「あ、当たり前だ！」

「クスツ、じゃーあ

“あの美術館で” 何十人もの人を無残に斬殺した

のは、誰かな？」

「あれは、手加減した！！」

「手加減？はあん」

それならなんで死んでるのかなあ、と不気味に笑う。
そしてもう一度笑い、言う。

「それは相手が能力者だった時の手加減と同じ”

……… 相手は“人”だ」

それでも、と続けようとしたさなか。

「はぁーい、ストツプう？」

と、上から人が。

彼女は明^{ミン}猫鈴^{マオリン}。落葉の親友だ。

彼女はある提案をした。

「合体技！？」

「うん」

こくりと首を上下に振る。

「例えばね！」

と猫鈴は言う。

猫鈴がそう言うのと、アルエムの左手が“勝手”に動き出す。

そして、マリーがアルエムの元へと“勝手に”寄る。

「ちよおつと力借りるね」

アルエムの手からは黄色い光。

現れたのは無数の木の切れ端。

風と木の力。

「これをマリーの力でえ」

「えっ？」

しゅうつうつ、と音を立てて、木は刃の鋭いナイフへと変化した。

「！！！」

だが。

そのナイフは今にも消え入りそうなるうそくのように揺らめいていた。

「続けるのは無理か」と落葉。

（やはり、マリー）

「あとは、マリーちゃん次第だあ」

ずばりと切り裂くように単刀直入。

猫鈴、容赦ない。

「私、次第……」

「あつ、えーつとねえ、マリーちゃんはねえ！」

「鈴」

猫鈴の言葉を落葉が遮る。

「余計なことは言つな」

はあい、とけらけら笑いながら返事した。
るるる。

携帯が鳴る。

「！」

通話ボタンを押し、落葉が自分の携帯の着信に対応する。

「はい、落葉ですが、……………はい」

ぶつりと電話を切る。

短い会話だ。

そして

「ふん」

と鼻を鳴らす。

「マリーの精神状態が出せたそうだ。」

（忘れてた）とマリーは思った。

「ついでにアルも見てもらえ」

修行再開？（後書き）

漫画では落葉ちゃんが

「あたし疲れた」って最後のセリフのあとで言ってます。

診断結果？（前書き）

新キャラです。

挿絵付きキャラ紹介でいろいろ。

診断結果？

ブランカの家で待ち構えていたのはブランカ本人の不機嫌な顔だった。

「は？はあ！？」

アルエムが視線を外す。

「帰れよ、白髪男。用無しだボケツ」

「スイマセツ！？」

ばたむと力強く閉められたドア。

（やさしいことしねえだろうなあ）
と内心疑るアルエムだ。

「ふいいいっ」

「？」

振り向くと誰もいない。

「？」

向かったと思われる、角を覗く。

今度は左側に曲がった。

『おい、アルエム』

「！！！」

ブランカのテレパシーが届く。

『その子追つてもいいが、まようなよ』

「へいへーい。だだっ広い家なんて作んなよ」

『あ”？』

「えっと」

こっちか、と眩き左へ曲がる。

「うおっ！」

そこにいたのはひとりの少女。

前髪は白く、紫の長髪が綺麗に後ろで結ばれている。

だぶだぶの黄緑色した服を着ていて、裸足。

左足にはサポーターらしきもの。

本を抱きかかえていた。

そして何よりも涙目である。

彼女は『クー』。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「ひゃあーん」

「あ、おい!!」

「ふん」

ブランカは自身の作った資料を見て鼻を鳴らす。

「お前本当に戦う気あるのか？」

「あります」

即答だ。

「ふーん」

(これで、か。 さっきのアルエムといい、“優しすぎる”)

「ぴゃうーん！」

「待てって!!」

走るクーから落ちた四角い箱。

勢いを止められず、そのまま踏んでしまったアルエム。

カチッ

とスイッチが押される音がする。

「カチ？」

その瞬間。

ドン！

と爆発音。

それを確認したクーはホツと息を漏らす。

「へうー」

「てめえ、なにしゃがんだああ」

アルエムは普通にしていたはずが、クーには鬼のような形相で睨む人ととれた。

「ひゃん!？」

クーは「ひっ」という情のない声を出す。

「うあああん　ぶえええん」

その泣き声はブランカまで聞こえるほど大きかった。

診断結果？

「ふわああああああん　びええええええん」

「おいアルエム！！！」

泣いているクーをなだめようとしているアルエムのもとへ、ものすごい形相の二人がやってくる。

「何泣かせ」「てるのよ！」「てんだああ！！！」

ブランカの蹴りとマリーのナイフが数本突き刺さる。

勿論K・Oである。

「大丈夫か、クー！！！」

「大丈夫？」

「ふいいいっ」

「若い女の子を襲うなんて！！」

「ひどくね！？」

「この子は「クー」あと一人「ムー」が居るんだがな」

「ムー？」

「ああ」

ブランカはメガネの淵を抑え、上げる。

「まあ、こいつに出会えるだけ運がいい」

人見知りでなあ、と嘆息した。

アルエムはクーを見る。

人形を投げて遊んでいた。

すると

「もう一人にはどーすれば会えますう？？」

ぐると鼻血を垂らして振り向いてきたマリィ。

本当のロリコンはこっちなのかもしれない。

「・・・・・・会っ?」
「はいいい?」

「トイレ、トイレ」と。

だだっ広い屋敷の中をさがすマリー。
すると、トタタツと走る音。

「?」

ペタリ。と不気味な音。

次の瞬間　　!

角から出てきたのはムーだった。

勿論マリーのどストライク。

「かわE^イ!!」

よく笑う子だった。

帰宅と奇襲

「マリーに精神状態は伝えたし、さ、帰れ」と、ブランカ。

ムーが袖をついついと動かしている。きつと呼んでいるのだろう。

何度も何度も呼んでも気づかない三人。

さすがのよく笑うムーもぶちりとキレた。

「どーした、ムー？　．．．うわあああ！？」

「．．．宜しくな」

ムーは気が済んだのかとてつもない笑顔だった。

「どーいうことだ？」

「二人が（？）ついて行きたかったらしい」

「素足で！？」

「「？」」

街に出たのはいいものの

「ひうー！ー！！」

ムーがショーウィンドウにおいてある作り物のパフェに釘付け。

それを引き剥がそうとクーが一生懸命。

そんな中、マリーに聞こえてきた小声。

「あの二人の子供かしら？　靴履かせてあげたいわね」

「ええ」

正論である。

「はふ？」

ムーはマリーの質問に試食用のお餅を食べつつ答える。

「クツ？」

（喋るのか！）

「らいじょーおぶ！」

（かわええ）

「ほ、本当？」

「だって」

ドゴツ

頭上からのいきなりの奇襲。

四人は

（クツ、私とアルは大丈夫、二人は！？）
元いた場所には姿はない。

「よかった」

そこでマリーの意識は切れた。
どさりと地面に倒れ込む。

華麗に着地した敵は、ただの、一般女性。

マリーを確認したアルエムは激怒し

「てめえ！」

と殴り掛かりそうになる。
が。

アルエムの前にムーが立ちはだかる。

「なっ、お前が行くのか！？」

ふるふると首を振る。

「じ、じゃあ誰が？」

「ふたりだよお」

帰宅と奇襲

上を見ると、泣きつつも大量の武器を持ち、相手に投げているクーがいた。

ドスドス、と痛々しい音を上げ、突き刺さるナイフ。
聞こえる悲鳴。

「！」

刺さったのは全く違う一般男性　　！

「へううう！？」

敵を探している時。

トン、と首を^ぶく。

空中にいたクーは落ちていった。^{そら}

だが、まだクーは立っている。

無理矢理身体を起こしている。

それを見守るように、敵にもものすごい威圧を送る二人。

ムーとアルエムだ。

「ぐっ」

さすがの相手もたじろぐ。

「くそっ！」

と逃げていった。

マリーが目を覚めたのはおなじみの体育館でだ。

「まったく」

と落葉の嘆息がお迎えした。

「おとは？」

ずきん、と痛む頭を抑える。

「無理はするな」

「わかつてる」

（私、一体何が？）

記憶がない。

ばああ、と自慢の笑顔を向けるムー。

相手はデビット。

「！」

軽く萌える彼であった。

そこにすかさず、ルナエラのきつついパンチ一本。

「帰る！？」

マリーがとてつもなく不安げな顔を向けてきた。

「へう」

「ちがいますよー、ねーさんと、みこさんにあいさつにいくんです
ー」

「あ、そう」

あっさり引いた。

「しばらくはかえりましえ、せつ、しえ、ません」
かわE！！

「さて、今日からアルね」

「マジ？」

大丈夫かこの主人公、という顔の落葉。

マリーが一通り終わったのが気づいてなかったらしい。

お前それでも彼女見てるのか。

「コリッタ」

「はぁーい！」

びしっ、と手を挙げる。

そしてにっこり微笑んで、

「パワーアップした、うさちゃんをとくご覧あれ！」

帰宅と奇襲（後書き）

ムーは基本ひらがな。

作戦会議

「ふえ」

クーが今にも泣きそうな感じ。

「くちゅん！」

くしゃみでした。

「あつは！みずたまりにとびこむからあ！ダイーブ！」

「に”ゆ！？」

不機嫌そうだ。

「あ、こけたのお？」

ずるずると鼻をすするクー。

そこに。

「あれー？」

「どーしたの、君たちい」

と声をかけられる。

誰かと思い見上げると

傘に乗って飛ぶでおなじみ美子と、零がいた。

「ふに？」

そして二度見。

「にゅおおおおお」

「アル！！」

「もう終了？」

アルエムの返り血を浴びたコリッタがそこに佇んでいた。

アルエムを見下ろして。

彼は「ぐふっ」と痛そうに血を吐き出す。

「しいぶといなああ」

「何もそこまですることないじゃ
トン、と何者かが首を風ぐ。」

「マリーー!!」

鈍い音。何か重いもので頭を殴られたアルエム。

「カップルして感情的すぎる。」

上げていた足を静かに下ろす。

「全く」

そこに居たのは美子だった。

「風治るの早いつすね」と落葉。

「僕ちゃんのはただの胃腸炎だからね~~~~!!」
と元気そうな零が言う。

「お酒の飲みすぎはNGさ！」

2週間程度の徹夜で倒れる体じゃないさー」

とお酒を飲み笑った。

勿論説得力はない。

「誰か、あの二人をどこか違う場所に移してくれないか？
会議をしよう」

「さて」

と美子が切り出した。

「今までの出来事は全て嘘だと理解している者だけ出てるか？」

と美子が皆に問う。

勿論返事は

「はい」

だった。

「今回の敵は厄介だぞ」

「例えば？」とデビット。

「二人の能力者、そして未だ不明者が二人だ」
「不明、ですか」

デビットの顔が曇る。

「否」

「それもそれで厄介だが、違う」
「？」

「主犯、グレイム・ラルトゥリ。 彼だ」

「グレイム？」

そのワードに今度はルナエラが反応した。

「情報持つてるよ！・・・多分」

「おお」

まっけてね、と頭に指をやる。

ディスカッション
記憶会話

そして静かに目を開けた。

「グレイム・ラルトゥリ。 長身で紫色の髪。 特徴的な冷たい瞳
所有能力は

ブラッド
『血』

そこでルナエラは苦しそうに顔をしかめた。

「だめ、これ以上は・・・、何か・・・・・・・・・・」
「無理するな」

ドパアア！と。

壁がぶち壊れる。

「に”っ！」

ゴン、とぶつかる音。

当たりには煙が舞った。

咳き込む声も聞こえた。

壁を突き破った人は、落葉だった。

「こそこそ嗅ぎ回るなよー？」

奇襲

「チイツ」

「おいっ！今ので二人が起きてないか！？
と誰かが言う。

たしかに今の轟音では起きている可能性が高いだろう。
「見てくる！」と明。

「……あ……あれえー？」

二人が寝ていた場所には

「やめるアルエム！！」

突き破られた壁から落葉の声。

アルエムといえは今寝ているはず。

だがアルエムはその場にいた。

そして、手からは炎を放ち、ある人物を襲おうとしていた。
そのある人物とは

「てめえが、グレイム！！！」

「！」

ブシュツと不吉な音。

「感情的になるな。馬鹿か？」

と言い放ち「フン」と鼻で笑う。

当のアルエムは、口から地を吹き出して、膝を地についた。

「動かないで」

「！」

瞬時にでも移動したのかマリーがナイフをグレイムに突きつけていた。

勿論、首元、である。

「ふん。生憎、女を殺すほど外道ではない」

「動かないで」

さつきよりも力を込めた声で言う。

「帰るぞフィルン」

「はぁーい」

グレイムは“マリーと全く逆の位置でそして背を向けて”佇んでいた。

「・・・・・・・・！！」

だがその逃げ道もある一人によってふさがれる。
グレイムの前に立ちはだかったのは美子だった。

「おやあ？」

「・・・・・・・・まあ待ちなよ。せつかく来たんだし師匠わたしになにか？」
グレイムは「フツ」と笑み、美子の横を通りすぎたところでこう言った。

「あなたはまた、甘いおこちゃま集団でもお作りですか」

と。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

これには美子も絶句だった。

折角ここまで育ててきた愛弟子を

“甘い”“おこちゃま”等の一言で片付けられたこと。
何も、言えなかった。

実際、彼に一人、否、二人も抜かれたのだから。

「待て！」

だが美子はそれでも彼女は彼を引き止めた。

「もう、改心……いや……もとは戻ってくれんのか？」

「……」

そして一言彼はこういった。

「これが、俺だ」

「ッ」

美子の頬には静かにしずくが伝っていた。

「俺らの存在が確実にあちらにバレた」

「マジイイ？」

墓穴掘るねエエエ、とララロが笑う。

「……」

険しい顔つきで黙り込んでしまったグレイムにフィルンが

「どしたのお？」

と問いかける。

「いや」となんでもないような仕草をし、次の言葉はこうだった。

「さあ、全面戦争だ」

奇襲（後書き）

長々と申し訳ありませんぐ。
。
）オイオイ

策戦

「すまん!!」

いきなり美子の土下座。

「やめてくださいよ!土下座なんて!」
カシャコ、と写真を撮る音。

「じゃあ、なんで携帯出てるの!？」

「そーよ!」

ピロリン、とこちらも。

「マリー!!」

「さて、本題に入るが・・・」

と真面目に美子が切り出した。

「“あんなこと”があれば、確実にこちらに仕掛けてくるだろう」
美子は不安そうにそう言った。
そして一息。

「だがこちらは不完全」

「!」

それにマリーが反応した。

美子の言葉に続けるように今度は零が言う。

「大丈夫なのは、まあ、当然美子ちゃん、僕ちゃん、
コリッタちゃん、ルナちゃん、デビットちゃんとーあ、
あの双子ちゃん!」

あの双子ちゃんとはムーとクーのことだ。

「・・・え?」

マリーがまたも反応する。

自分たちは入っていないのか、ということだろう。

「君たち二人は当たり前になっちゃうけど
失敗作だよん」

きついお言葉だ。だが事実。

「だって」

と続けた。まだあるのだろう。

「君たちは人を殺せないだろう」

可愛く首をかしげてみせるが、無表情。
本気なんだろう。

「こ、殺せます！」

震えた声でアルエムがそう答えた。

「そーか」と零が適当な相槌を打つ。

そして満面の笑みで

「じゃあ僕ちゃんを今殺してみてよ」

「~~~~~ッ」

絶句。

「冗談だよ^{ウツ}」

クスリと笑むが、その微笑みは不気味そのものだった。
そして美子が。

「どっちにしろ、不完全、未完成。」

「もう修行はいい」

と、落葉。

「!？」

「ルナ、コリッタ、デビット。」

「……………少しいいか？」

策戦？

「えっ」

「時間を狙って襲え！？」

それが落葉の頼みだった。

「ああ、周囲への警戒が薄れすぎだ」

勿論、襲う相手はアルエム、マリー。

「頼んだぞ」

「はい」

三人はそう返事した。

外を見、うつむくアルエム。

「・・・人を殺さずに助けられないか」

声のぬしは美子だ。

「・・・美子さん・・・」

フツ、と微笑み

「単純だな、いつでもお前は」

とうそぶいた。

「妾^{あたし}もそんな風に前向きに考えられたらね」

「・・・」

ピチャン、と滴る水。

否、血。

数滴などでない。大量の。水たまりができるほど。

「グレイムー、血イ臭い！！」

「あー？」

そして彼は嘆息し

「あと少し、待て」

と言う。

指先には滴る血が触れていた。

その血は触れた瞬間形を変えた。

グレイムは悪魔そのもののような笑みを浮かべる。

「完璧だ」

時は、日付は、嘘のように一週間も過ぎた。

キュ、とカレンダーにバツ印をかくため一本線を引く。

するとどこからかピシ、と不吉な音。

もう一本、キュ、と引く。

今度はパシッ、と不吉な音。

（なんの音？）

マリーが不思議に思う。

次の瞬間。

体育館の壁は、脆く崩れ落ちた。

決着

マリーはその壁に向け、構える。

「マリー！！」

「！」

そこにアルエムも駆けつけた。

パラパラと破片が舞う中、ガレキをバキバキ踏み、登場したのが彼。

「よお、遊びに来たぜ」

「ッ」

グレイムだった。

「・・・お久しぶりですね、零さん」

「！」

「知り合い？」

「おおオオオ？」

ディシダのウザイテンション。

「マリーじゃアん？」

「！」

「オレだよオオオ！知らん？ほらー！？」

同じキンパだねと騒ぐ。

だがマリーに心当たりはない。

「じゃー、これはアアア？」

しゅううつう、と煙が舞う。

姿はいつしか、彼女らを襲った女性に変わったのだ。

「まあってえ、グレイムー」

とフィルンがグレイムを追う。

「！」

だが惜しくも足を止めた。

目の前にルナエラがいたのだ。

「……………ツインテールに生まれたこと、後悔しな」

要訳：あたしが相手だ

「へえ」

と余裕そうに笑った。

「あら」

とカルラの素っ頓狂な声。

「あなた、戦うんですか？てつきり終始見学かと」

カルラの道をふさいでいたのは、零だった。

「あははっ、まーそーなっちゃんねー、戦っちゃんだよっ！」

「……………はあん……………」

ライクファースト

「岩手！ー！！」

と岩のように強く、更に固く握り締められた拳がグレイムを襲う。

「甘い」

あるエムに向かって手を向けたのはいいものの、その先には誰もいない。

「！」

「……………なあ」

「……………」

「^{ケリ}決着つけよーぜ」

決着？

「とーくべつに教えてやるよオオオ」

喜々とした声でそう言った。

「は？」

警戒を解いていないマリィはただそう答えるしかなかった。

「オレの能力を！」

「！」

一息ついて、彼はこう言った。

「オレの能力は アブソフ 強奪！！ 他人の能力を ちから 無条件に奪う！！」

「！！」

そういえば、と振り返る。

先程の戦闘でもマリィは奴に自分の術を盗まれた気がした。

ただのナイフを取り出す手品だと思っていた が！

今その真実を聞かされ、驚くマリィは次の一手は考えつかずにいた

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

こちら、零VSカルラ。

零はというと

壁にもたれかかり、口からは血が流れいていた。

「うふふ。あんな自信満々に言ってらっしゃったのに、弱いこと。クス」

口元を隠すように笑う。そして嘆息し

「……………止めでも指しますかね」

と冷たく吐き捨てる。

「不幸せな記念日」
ハッピーバースデー

彼女^{れい}に向かい、強大なエネルギーが猛スピードで

「死ね」

ぶつかった。

辺り一面には砂煙が立つ。勿論カルラの視界も悪い。

煙が消えかけた頃。 零を確認するが

「!？」

いない。

「いない!？ど、どこに ？！」

(まさか、上 !？)

上を見る。 案の定。

零と、零をつかんだ男……。 バルド「エクスがいた。

バルドは地に着地し、カルラを見る。 カルラは盛大に舌打ちをしていた。

「お、間に合った系？」

零がバルドの足元で「おそい」と切れた。

「まあいいや。」

と笑う。

「『お遊びの時間』」
フリーアクション

決着？

「『フリーアクション』
お遊びの時間』」

そう、バルドが唱えると周りが闇に覆われていった。

「！！」

カルラは驚いたらしく、周りを見渡していた。

「さあて、これでお前の力はゼロ。」

バルドは静かに低く言った。

向こう側には零が口の中に溜まった血を吐き捨てていた。

「こいつが俺にこれを頼んだ条件は三つ。^{れい}」

？ 傷の全快

？ 敵の無力化

？ 敵の収納

だよ。 契約金はなんと驚きプライス一千万」

驚きだ。 敵の収納というのは、負けた敵を捕まえておく、という意味だろう。

「~~~~~！！」

これにはカルラも絶句する。

（そんな事すれば立ち位置が！！ あ、謝ろう！）

「あ、謝りますよ！ ですから」

「そお」

笑顔でそういう。 カルラはホッと一息付いた。

「一発。 ぶち込んでからね」

さっきまでの笑顔が逆転した。

「ひいひいひいひいひい！」

それを聞いたカルラは這いつくばって逃げ惑う。

「ムダだよ」

ゆっくり、ゆっくり足を進める。

「ぶっ！？」

カルラが何かにぶつかる。壁だろうか。

「広さは そうだね、約教室ぐらい」

「く、来るな！！来ないで！！
最新ページ一枚！！」

「無駄だって。攻撃は無力化されてるんだよ。」

につこりと微笑む。

そして拳を握り締め 思いっきり、一発。

「ぐがっは」

殴り終わると同時に黒い世界がフェイドアウトする。

『お前は他の奴の助けをしろ』

頭の中に鳴り響くバルドの声。

「！」

『何かあれば電話しろ』

フリーアクション
お遊びの時間はどこからでも出現可能なのだ。

「……………うん。ありがとう」

こちら、グレイム&フィルン

「グレイム……、僕も僕も！」

フィルンが妙に元気がいい。

「一緒に戦わせてよ」

「駄目だよ」

現れたのは、ルナエラ。

「ツインテールの座は譲らないよ」

根に持っていた。

こちら、デイシダ。

「おおい、おーい？弱いよ？」

デイシダの目の前には、口から血を吐き、壁にもたれかかっているマリーがいた。

「ひゃひゃひゃ」

こちらにも上機嫌である。

「とどめエエエー！！」

そう言つてナイフを振り下ろした。

「なっ！？」

だが、マリーに外傷は今まで付けたものしかない。当たらなかつた、否。

「おいおい、あんま愛弟子をイジめねーでくれよ」

「……お前は バケモノ 美子！」

弾き飛ばされたのだ。美子によって。

「……下さい」

「！」

マリーの、消え入りそうな小さな声。

「やめて、ください」

後ろを向くと、ボロボロで血がだくどくと流れていたマリーが立っていた。更にふらついている。

「私一人で……なん……とか……」

「無理言っな。」

「！ 美子さん！！」

「ん？ いて」

どす、と不吉な低い音。

美子の背にナイフが突き刺さる。

決着？

美子の背中に重くナイフが突き刺さる。

「さあ、お得意の回復使えよオオオ」

にいいと意図があるかの様に不適に笑む。

「使えりやあな」

その手にもっていたのは、毒付きのナイフだった。

「！！！！」

幾ら美子でも、使いの力で作った独の解毒は不可なのだ。

と

いうことは。

倒れる。

「美子さん！！」

（さあてエエエ、これで本気出してくれるかなアアア？）
だいじなひと

美子を倒れさせたのは、殺意をそそるため。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

だが。

その怒りは、殺意をも超え、更には傷を回復にまで及ぼした。

次の瞬間

「！？」

いつの間にか目の前に現れナイフを構えるマリー。

（速い だけじゃねえ・・・・・・重い！）

完璧にコピーしたデイシダのナイフがぎぎぎと唸りを上げていた。

「・・・・・・・・・・ッチィ」

ガアンと弾き返し、距離を置く。

マリーの怒りはまだ、おさまっていない。

「お前、なんだ！？ なあ！！・・・・・・チッ！チッ！！ チッ

！！！！ 死ね、死ねエエエ！！！！」

そう言いつつ手を構える。

「ぶつ殺す！！！！」

「！」

その頃のお遊びの時間。
フリーアクション

「！？」

収納していた、カルラがパリパリと消えていくではないか。

「な！？こいつら、人じゃねえの！？」

しまいには全てきれいに消えた。

決着？

「 なっ！？」

たたたたたと長い道を走る零。

「 本当か！？あいつらは本体じゃない！？」

『 ああ・・・声がでかい』

「 ということは倒せないのか？」

『 いや』

バルドはお遊びの時間^{フリーアクション}で作ったモニター操作室のような場所にいた。

「 お前が倒した時の様に、強い衝撃を与えれば良い」

『 ふん？』

「 が」

『 ……？』

遠くを見据える悲しい目で言った。

「 本体は、生きている。」

「 …… 流石に二回殺^やり合うのはキツイな」

『 ああ』

携帯端末を持ち走る零に激痛が走る。

「 …… ツ！？」

その所為で持っていた端末機器は床に落ちる。

『 お、おい！？どうした！？』

零の体の各部がズキズキと痛みつつある。

（まさか）

『 ラストページ
最期の一枚！！』

（あの技は発動していた！？）
痛みはさらに増す。

「・・・・・・・・つぐあ」

これ以上心配はかけまいと携帯の通話を切るボタンを押す。
ざり、と人が来る音。

「・・・・・・・・」

掠れ見えにくい目を開け、誰か確認する。 黒い上着に水色のズボン。
そして

ドッ

「おと・・・・・・・・は？」

ごぶ、と口からは血が流れ出る。 腹部をけられた衝撃だ。

その後、抵抗も出来ぬまま蹴られ殴られ続ける零。

そこに居たのは茶髪の似合う日本人女子だった

「アル！」

どうやら、アルエムのもとにマリーが駆けつけたらしい
その駆けつけたマリーをアルエムは木の力で締め上げる。 が

「・・・・・・・・ぐ！？」

「嘘つくな、ニセモン」

「マリーの前髪は右分けた」

「気持ち悪いわよあんた！！！！！」

激怒した本物のマリーが駆けつけすぐにアルエムを殴った。

まあドヤ顔であんなこと言われては嬉しいが恥ずかしい。

「・・・・・・・・！！マリーも気付いたか」

「ええ」

そしてアルエムは、周りを睨むように見渡し、

「見てるんだろ、本物さん！！　コソコソしねえで、出てこいよ！！」

といった。

あちらもすんなりと

「ふん、いいだろう」

と姿を現す。出てきたのは二人。

ぺたりと裸足が着陸する音が伺えた。

決着？

その裸足の主　グレイムでない者は

「・・・・・・！？落葉！？」

落葉だったのだ。

> i 2 9 6 9 9 — 2 2 0 7 <

「行け」

そうグレイムが指示すると、真っ先に二人を狩りに行く。

「嘘よ！ねえ、落葉！？」

狙ったのはマリィ。　勿論一戦しているので負傷している。

マリィは端まで飛ばされそれから動かなくなった。

「マリィ！！」

そういつて視線を外した時。　アルエムも狙われた。

もう一度視線を戻すと、喉元にはナイフ。

「！！」

そしてグレイムから冷たい一言がかかる。

「殺せ」

もう一度。

「殺せ」

落葉はナイフを逆手に持ち直し、顔を歪め、アルエムに切りかかっ

た。

が。

右頬を掠めただけで出た血もごく少量。
それを見たグレイムは

「使えんクスめ」

と呟き指バツチンした。
フィンガー스ナップ

すると落葉の体から大量の血があふれ、前のめりに、アルエムの前
に倒れた。

ぶちん、とアルエムの何かが切れる音がした。

「グレイム！！！！ お前は、俺が ぶつ殺す！！！！」
> i 2 9 7 0 0 — 2 2 0 7 <

グレイムは下をぺろりと出し、
「ふん・・・・・・・・やってみな」
といった。

決着？

両者は数秒睨み合い、そして先手を打ったのはアルエム。

グレイムが追いつかないぐらいの速さで移動し一発で決めた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

見ていたマリーも絶句。

壁にまでぶち飛んだグレイムは口から血を吐く。

「・・・・・・・・がつ」

「俺を変えるのはお前への恨みじゃねえ。

仲間だ」

「な、仲間！？」

「さあて」

懐かしい声をする。

美子だ。

「追いついたぞ」

「美子さん！！」

それを見、『ぎりり』と口を噛む。

「お、俺が負けるのは」

「グレイム！！！！」

そこでフィルンが介入する。

「もう、いいよ。もうやめよう」

「うるせえ！！」

「グレイム」

美子が静かに名を呼ぶ。

「お前の勝利は仲間が笑わぬ」

冷たくひっそりとした目でそう続けた。

グレイムは感に障ったように目を細めた。

「お前が勝ちたいのは仲間のためだったろう」

「なか・・・ま」

> i 3 0 3 0 9 — 2 2 0 7 <

『あ・り・が・と・う　グレイム』

「俺は・・・・・・・・・・・・・・・・」

グレイムは静かに涙を流す。　いつの間にか、誰かを殺すために力を使っていたことに後悔しながら。

アルエムは右手を構え、止めを刺そうとしていた。

「やめて」

それをフィルンが止める。

「途中から、理性をなくしてたかもしれない。だけど。意味あつて暴れてたの」

「？　言ってみて？」

「うん」

フィルンは素直に首肯する。

「・・・・第三次世界大戦と謳われる程の大きな戦争　わかる？」

「え？　ああ、わかるわ」

「それを共に食い止める人を探してたの。」

『俺を倒すような猛者たちを』ってね。」

「！」

グレイムは腹部を抑えつつ立ち上がる。
そして、微笑んだ。

「残念ながら、お前たちは合格だ」

決着？（後書き）

挿絵のサイズミスったけど
気にすんな 誰も見てねえ

父親と

「詳しい事は傷が癒え次第伝えよう」

「ああ」

晴天とも言える天気がいい日。

彼女、マリー・ウェポムンドはぼーっと空を見ていた。

「あー、暇だわー」

そう言いつつ。

そう。あれから三ヶ月が過ぎた。

グライムは全身複雑骨折だったらしく……。 全治五ヶ月。

医師曰く「生きていたのが奇跡」らしい。

静かな日常が戻ったのだ。 そう思いマリーは目を閉じた。
ドガガツ という音に不快な顔をする。

そしてもう一つの窓を覗く。

「ぬう、やるな！零！！」

「そっちもね〜！！」

美子の作り上げた異空間で二人は鍛錬中。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。はあ・・・・」

重々しいため息を漏らすマリィだった。

（アルはどうか行くし、この人たちは修行漬け・・・・）

その頃のアルエムはというと

崖の上にある一軒家へと向かっていた。

「・・・・・・・・・・！・・・・やあ。来たかい。我が息子」

ぎい、と重々しいドアを開け仲へと進む。

「“親父”いるか？」

「うん。ここー」

> i 3 2 5 0 2 — 2 2 0 7 <

となりかい！！

「いつやー、大きくなったな！」

へらへら笑いつつアルエムの父・ルゼエム・D・ペイズリーはいう。
アルエムとゞ白髪だがロング。

だが一番肝心なのは、外見。アルエムの父と言えば五十、はこえているはず。

それなのにまったくもってアルエムと同じ外見。

「頼み事かな？」

「！」

「・・・まあ下山しよう。私も美子に会いたい。」

「は！？」

「うして再び下に取りることになった。」

父親と ？（前書き）

お詫び

前回のお話で挿絵を入れるのを忘れていました。
あげましたので、お暇でしたら、是非。

父親と？

美子宅

「やあ」

「ええええええ！？」

（に、似てる！アルに似てるわ！！）

と内心思いつつマリーは問う。

「えと、お兄さんか・・・何か・・・？」

「父だよー」

「！！」

異常なまでに反応するマリー。

一応二人は付き合っているのですそれはそうだ。

「やあ、美子」

久しぶり、と近付く。

「さん を付けろ さん を」

それを無視するかのように微笑んで続けるルゼエム。

「うちの息子が世話になってるね」

「なんの」

そっちこそ、と美子。

「“山”を後にしていいのか？」

「ん？ まあね。いやー地上が面白そうで」

「ふん・・・面白い・・・ねエ」

半信半疑な目で彼を見つつ紅茶をすする。

「ところで、マリー、どうだ？」

「あいつの彼女さんだっけか？」

アル
お見通しである。

「ああ」

「別に悪くないが？」

「へー」
「？」

ばさ、と新聞がめくられる音。

「・・・ふむ、第三次世界大戦級の・・・ねえ・・・」
「！　　アル！」

「すまん、私だ」

新聞からのぞく顔はなんとなくルゼエムだと察し顔を赤らめるマリ。

「・・・そうかアルエムの彼女くんか。刃物好きそうだね」
「！」

その言葉に反応する。

「す、好きです！あの・・・私、カトラリー・マスター刃物使いなんです！」
「なんでおわかりに？と嬉しさを隠しきれず聞く彼女。」
「・・・マスター使い？」

「？」

「・・・あ・・・いや、なんでもないよ」

「私は元々占い師でね」

「・・・・・・占い？」

「ああ」

「・・・・・・D・ペイズリー・・・」
「・・・・・・占い・・・」
「・・・・・・白髪・・・」

マリーの思考はそれだけをかき回す。

「！」

何か思い出したようだ。

「魔法使いルゼエム！！？」
マジシャン

「！……………ほう？」

不敵に彼は微笑んだ。

「若いのによく知ってるね、“盗賊さん”」

「……………“元”ですよ……………というか！！」

ばん、と目の前にあった机を叩いた。

「し、知らないも何も！！」

そして語り始める。

「トリプルエスクラス
SSS級の化け物を一人で倒したり、

“太陽”を操ったり！！

“伝説の人”とも言われるお方がいま！！」

興奮し、我を忘れルゼエムを語りだすマリー。

だがその語りを聞いていたのはルゼエムだけではなかった。

扉越しに、アルエムが盗み聞いていたのだ。

（知らなかった……………まさか、“あの人”が親父だったなんて
）

「あははー」

と、ルゼエムはマリーの話を苦笑しつつ聞く。

話を聞いている最中、彼は指をクルリと回し、円を描く。

すると、アルエムの隠れていた扉が外れ、アルエムが転がり込んできた。

「・・・アル？」

「前から言ってるだろ？もう少し上手に盗み聞け」

「無理だし！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1726s/>

続 自然使い ナチュラル・マスター

2011年10月7日20時00分発行